

Fieldnote : Ban Nong Ngoenhoi in 1990

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/440

フィールドノート「ノンガンホーイ村, 1990」

佐川 哲也

Fieldnote : Ban Nong Ngoenhoi in 1990

Tetsuya SAGAWA

このフィールドノートは1990年5月に作成されたが、未発表のままになっていたものである。フィールドノートとしては決して質の高いものではないが、当時のノンガンホーイ村の状況を記したものとして資料的価値の高いものと考えている。投稿にあたって、説明不十分な点などについて若干の加筆を行った。

1. ことの始まり

私たちがノンガンホーイ村を初めて訪れたのは1988年12月のことであった。1983年にタイ国ウボン県で調査を始めて6年目のことである。かねてより希望していた東北タイ農村での初めての調査であった。そしてその翌年である今年、ここノンガンホーイ村で農村の生活を体験できる機会を得たのである。

このノートは、1990年2月1日から3日までの2泊3日の日程で、田中秀幸君（当時、筑波大学体育科学研究科在学中）と佐川哲也（当時、同研究科在学中）が、タイ国ウボンラーチャターニ県デッドム郡ノンガンホーイ村に滞在した記録である。

私たちは既にこの村を2度にわたって訪問していた。第1回は1988年12月に、同村ノンガンホーイ村小学校において「児童の運動能力と遊び生活に関する調査」を実施したものであった。第2回は1990年1月に「児童の体格に関する調査」を実施したものであった。しかし、過去2回はウボン市からの通い調査で、村内で生活する子どもを十分に観察することができな

かった。それに対する些かの不満から、第2回調査を終えた時点で、機会があれば同村に滞在して子どもたちの村での生活をじっくりと観察し、体験したいと希望していた。それが実現することになったのである。今回我々が同村を訪れた目的は、ノンガンホーイ村の子どもの生活、特に、朝夕の家庭内労働の様子を観察すること、ならびに学校生活を時間の流れに沿って把握するとであった。

我々2名が同村を訪れるにあたり、ノンガンホーイ村小学校のスプラディット・ムシカワン教諭にご協力いただいた。氏は宿舎・食事の手配と通訳にと貴重な時間をさいて我々に支援して下さった。氏は東南アジア保健統計研究会¹⁾の最も信頼できるカウンターパートであるシーナカリンヴィロート大学講師のスカンヤ・パニッチャロンナム先生の実弟であり、1988年に我々を同村に招いた本人である。

2. いざ、ノンガンホーイ村へ

訪村の準備は滞在中の食料の調達から始まった。それは外国人である我々には同村の食事が向いていないというスプラディット氏の提案に基づくものであった。当初、我々は氏の提案に対して「日本人にとってモチ米は贅沢品であるから、そんな心配は無用である」と考えていたが、実際に村を訪れてモチ米しかない村の食生活が飽食に飼い慣らされた我々にとっていかに苦痛であるかを思い知らされたのであった。氏の提案を今にして思えば、たとえ2泊3日の短

期滞在だとはいえ、粗食からくる精神的な不安を都市的食料を持ち込むことによって緩和しようという意図であり、同時に、突然の乗客への負担を村人にかけないようにする配慮であったと思われる。当然の礼儀だったなとあとで教えられた次第である。

ウボン市の市場で保存性の高い加工肉やパン、コーヒー、調味料の類を買い込み、調査に必要なビデオカメラやテープレコーダー、宿泊のための毛布をバッグに詰め込み、村へ向かうバス停留所へ行くべくトゥクトゥク（小型三輪自動車タクシー）へ乗り込んだのである。かねてよりの願いであった村へ行けるのだという期待と、村の人たちが快く我々を受け入れてくれるのだろうか、調査はおろか3日間の生活にすら支障をきたすのではなかろうかといった不安が、停留所でバスを待っている間中脳裏を何度も駆け巡ったのを思い出す。乗り込んだバスはバンコクへ向かう長距離バスであった。我々はバスのルートを氏から聞いてはいなかったが、最初の停車地デウッドムを過ぎて後、同村の入口で途中下車するのだなとすぐに理解された。天井でカタカタと回る扇風機の音と、威勢のよい若い乗務員の声聞きながら、また、見慣れぬ外国人に対する視線を受けながら、村へと向かって走り続けるバスの窓越しに殆ど変化のない灌木と刈り入れの終わった水田を眺めていた。デウッドムを出てノンガンホーイ村が近づくにつれ、見覚えのある風景を見るにつれ、私の期待は徐々に高まっていた。あの坂道を上って右にカーブすれば村の入り口があるという具合に、「行きたい、行きたい」と思っていた希望が何分か後には叶う喜びに胸を踊らせていた。思い浮かべていた通り、懐かしい村の入口のゲートの前でバスが止まった。バスを降り、重い荷物を抱えてゲートの前に立ったとき「よし、来たぞ！」という気持ちで満ち溢れ、先ほどまで頭を悩ませていた不安はどこかへと消えさせていた。

村の入口から村までは約3キロメートルあ

る。ひとり5パーツを払って通称スカイラブ（バイクを改造した三輪タクシー）に乗り込んだ²⁾。村へ通じる道は赤いラテライトの凸凹道である。スカイラブに揺られてやっとたどり着いた村のゲートをくぐると、突然やってきた外国人に興味をもって集まって来る村人の視線を受けた。視線を受ける気恥ずかしさよりも、なぜか「やってきたんだ」という気持ちを実感していた。そしてついにノンガンホーイ村小学校に着いた。

ノンガンホーイ村小学校は、生徒数237名、教員12名の東北タイでは中規模の典型的な農村の小学校である。237名のうち27名が幼稚園年長組である。タイの小学校の多くは幼稚園を併設している。また、全校児童中15名が、隣のパーティウ村から通っている。教員は12名中4名が村内（週末には自宅に帰るが平日には学校内にある宿舎で生活している先生も含む）に住み、男性が9名、女性が3名である。ただし12名中4名（女性1名を含む）は「公務手強い」として、小学校外で公務に携わっている³⁾。訪れた時点で実際に学校にいて児童の指導に当たっていたのは9名であった。その他に用務員が1名いる。

3. 村での生活

我々は小学校の敷地内にある教員宿舎の1室を宿舎として借りることとなった。教員宿舎は毎日自宅からの通勤が困難な教員のために用意されたものである。この学校の宿舎は二階部分が居室となっており、一棟にひとり用の部屋が2室あった。現在、ふたりの先生がここを利用している。部屋の広さは8畳程度で、入口以外の3方の壁にはガラスの入っていない木製の窓があり、壁はすきまのなく板が張られていた。床も板張りであったが、隙間から階下が覗けていた。天井には裸の蛍光灯がひとつある大変質素な造りであった。一階部分は倉庫とトイレ兼水浴び場になっていた。トイレはタイ式水洗トイレで、使った後にすぐ脇に備え付けられた水

槽の水でお尻を洗うとともに、その水を流して使う。また、水浴び用の大きな瓶がおかれていた。瓶の水は先生が（時には児童が）近くの井戸から汲んでくる。宿舎の前には雨水を貯めるタンクと雑用兼食事用のテーブルがある。この村には水道がなく、飲料水は天水に頼っている。雨季に降った雨を屋根で集めて1年間の使用に耐え得るだけの大きなタンクに蓄えておくのである。我々もこの水を常飲したが、幸いお腹をこわすことはなかった。川や井戸から飲用に適した水の得られない多くのタイ農村では昔から雨水を飲用として利用してきた。我々のために、用務員さんが、布団と枕を用意してくれた。

夕方、私が村の様子を観察して帰ってきたときには、既に食事の用意が始まっていた。初日の夕食は3人の子どもたちが作ってくれた。ひとりにはスプラディット先生の昨年の教え子で、現在は村外の中学校に通っている女の子である。あとの二人は6年生の男子である。これまでの調査で子どもたちが食事の用意をすることができると思っていたが、早速、食事を作る様子を見せてもらえるとは思ってもいなかっ

た。本来は、自分たちでやるべきことであり、そのための用意もしてきていたのではあるが、せっかくのよい機会であるので我々は邪魔をせず、観察させてもらうことにした。はっきり言うと、驚くほど見事に手早くしかもおいしく作ってくれた。

料理は鶏を絞めることから始まった。これに挑んだのはふたりの小学生である。私自身は子ども時代を山村で過ごしたので、鶏の絞め方を見て知ってはいた。実際にやったことはなかったが、やれと言われればやれる自信があった。しかし、実際に子どもたちが絞めるのを見て、彼らのようにはうまくやれないという結論に達した。ノンガンホーイ村式の鶏の絞め方は次のようであった。まず、鶏の足を紐で縛り足で押さえる。左手で羽を後ろ手に持って動きを封じ、右手で頸の羽毛をむしる。頸の羽毛をある程度むしったところでどんぶりを用意し、頸に包丁を入れて吹き出す血をこのどんぶりに受ける。日本では、おそらく血は捨ててしまうのであろうが、タイではこれを加熱して固めて食べる。貴重な蛋白源である。この血を固めた食品は、タイ国滞在中何度か食べる機会があり、



写真1 鶏を絞める小学生

うまいからと勧められることもあった。しかし、食べ慣れてない食物はやはり食べにくいもので、私は殆ど味をみる程度で多くを残した。この血はあとで料理に加えられた。血を集めたら、頸を捻って殺す。その後予め沸かしておいた湯に羽毛のついたまま丸ごと浸け込み、羽毛をむしり易くした上で羽をむしる。この時ハプニングが起きた、十分に頸が捻れておらずまだ生きていたのであろう、熱い湯に浸けた途端に死んでいたはずの鶏が暴れ出したのである。おかげで少々でこずったようだ。すべての毛をむしったあとで包丁が入れられ、先程まで走り回っていた鶏は、内臓と肉、骨に分けられ人間様のおかずとなってしまった。野生に近い状態で育てられていたためか、肉の少ない鶏であった。しかし、タイでは殆ど捨てることなく処理される。実際ここでも骨と内臓はスープに、肉はラープ（肉とハーブ野菜とを香辛料で味付けした東北タイ料理）に、そして血はスープとラープの両方に入れられた。また、羽毛の柔らかい部分は集めて枕などの中身として使われる。

火は炭を使う。タイ式の七輪である。紙、小枝そして炭を入れ、先生に借りたマッチでいとも簡単に炭に火をつけた。日本ではキャンプのころになると「炭に火をつけるのは難しい」とよく言われるものだが、彼らにとっては当り前の文字通り日常茶飯事としての基本的な生活技術なのである。火の加減についても手慣れたもので、最初は小さな肉片で加減をみておいて、適温になったところで料理をする。こうして、ウボンより持参したムー・ヨー（豚肉の蒸しハム）とムー・クローク（ソーセージ）は、女の子によって手早く揚げられた。夕焼けが真っ赤に空を染め始めるころに始まった夕食の準備は、陽が沈んで辺りが暗くなり始めたころにすべてできあがった。できあがったおかげで、ムー・ヨー揚げ、ムー・クローク揚げ、鶏のスープ、血の入った鶏肉のラープ、そしてカウニャウ（蒸したモチ米）である。多分こんな豪華な食事は、この村では結婚式やお祭りなどの特別

な時でない限りお目にかかれぬ特別お客様料理であろう。

2階のテラスで先生と我々の村で最初の食事が始まった。先生たちは我々がお客様だからと言って、また我々もいつも贅沢な食事をしているのだからという理由で、互いに気をつかい合いながらの食事であった。タイ式に言えば、食事における国際交流がもたらしたグレンチャイ（遠慮）の構図であろうか。先生とのやり取りをしている間に、先程用意してくれた子どもたちのことが気にかかり始めた。先生方をお願いして、「上がってきて一緒に食べる」よう声をかけてもらっているのだが、いっこうに上がってこない。しばらくして、まるで「叱られている」かのように上がってきた。しかし、なかなか食事に手を出さない。カウニャウには手を出しても、我々が勧めるハムやスープはなかなか食べようとしない。再び、先生に叱られるように促されて、手に取って食べ始めたが、隠れるように気を使いながらで、子どもらしさが感じ取れない。「我々や先生の前だから遠慮しているのですか」と尋ねると「そうだ」と言うので、残ったソーセージを袋にいれ、家でならおいしく食べてくれることを祈って、お礼の10パーツを添えて手渡すと礼儀正しく合掌（ワーイ）して、部屋を出て行った。この後、きちんと片付けをしてくれたことは言うまでもない。

4. 村長を訪ねて

食事の後、学校や村の調査許可をもらうため、スプラディット先生と3人で校長と村長を訪ねた。現在校長は同小学校開校間もなくの頃に赴任し、同村内に居所を構えた。家は村のほぼ中心にあった。既に玄関は閉めてあったが、突然の訪問であるにもかかわらず、学校内を観察することならびに学校内の教員宿舎に滞在することを快く承諾下さった。さらに、保証人として村長さんに紹介して下さることになり、すぐさま村長宅を訪問する運びとなった。村長の家は校長先生の隣にあった。校長先生が玄関から声

をかけると、すぐに返事があり、いかにも威厳のありそうな初老の男が現れ我々を家の中へと招き入れた。村長の家は高床式木造二階建てで、他の家より一段と高く造られた感じはいかにも村長の家らしいと感じながら急な階段を上って行った。二階に上がると広い板張りの応接間があり、正面の壁の高いところに国王陛下と王妃の写真が厳かに掛けられていた。左手には一段と広い居間が薄暗がりの中に広がっており、そこに村長と突然やってきた外国人の来客に驚く村長婦人が座っていた。婦人はキンマ^マを噛んでいた。我々は促されるままに応接間のソファに座った。そして我々がスプラディット先生に英語で話し、先生がそれを現地語であるラーオ語で通訳するという形式で村長とのやりとりが始まった。話は以下のものであった。[Qは我々の質問であり、Aは村長の返答である。]
 Q：我々は日本から来た学生です。これまでに同村を2度訪ねさせていただき、小学校で子どもの遊びや生活について調査をして来ました。今回は、これまでできなかった朝夕の生活につ

いて見せていただきたくやってきました。我々が村の中を自由に歩き回り、人々と話をしたり、写真を撮ったりすることを許可していただけないでしょうか。

A：本日はよく私を訪ねてきてくれました。小学校に日本からお客さんが来て、子どもたちによくしていただいたことは校長先生に聞いて知っております。小さな村ですが、どうぞ御自由にご覧下さい。

Q：質問を幾つかしたいのですか。

A：どうぞ。

Q：ここに村ができたのはいつのことですか。

A：仏歴2489（西暦1946）年です。

Q：学校ができたのはいつですか。

A：2499（1956）年です。

Q：村の入り口にある保健所はいつできましたか。

A：2517（1974）年です。

Q：何年前から村長を務めていますか。

A：2505（1962）年からずっとです。

Q：今年は昨年より米が多く穫れたのではない

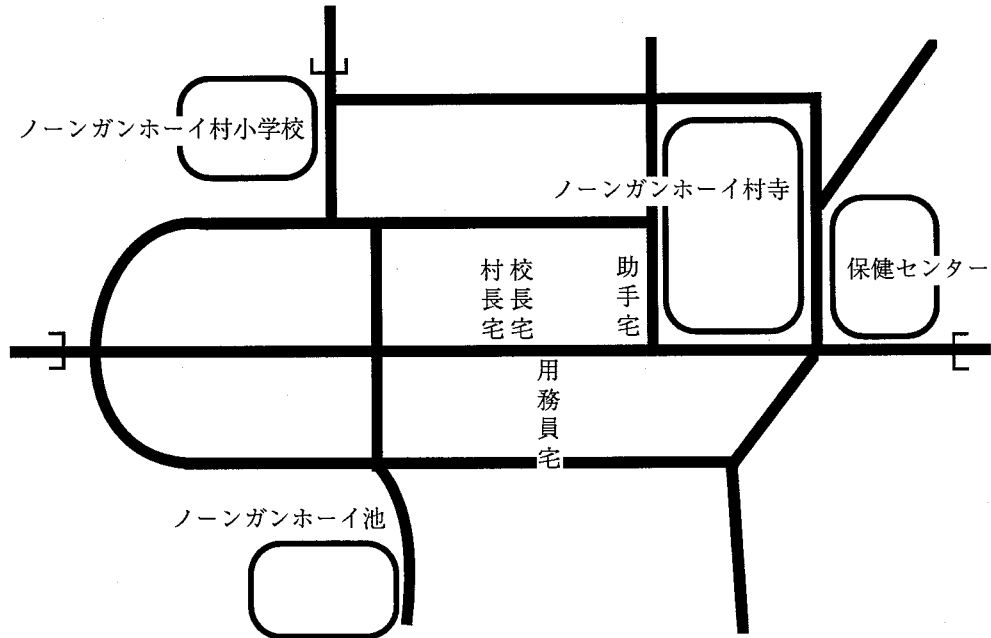


図1 ノーンガンホーイ村略図

かと思いますが、どうですか。

A：そうです。今年はどこかの田圃でも米の出来がよく、平年を上回っていてみんな喜んでます。

Q：どのくらいよかったですか。

A：昨年は平年並みでしたが、今年は昨年の2割増しくらいでしょうか。

Q：一戸あたりの年間収入はどれくらいでしょうか。

A：米による収入が平年で5000バーツくらいです。

Q：電気が村に来たのはいつですか。

A：2527（1984）年ですからちょうど6年前です。

Q：テレビは村にどのくらいありますか。

A：全戸数156戸のうち、だいたい50軒くらいでしょう。

Q：村に電話がありますか。

A：ありません。

Q：近年村の生活が変容してきていると思いますが、急激に変容したとしたら、そのターニング・ポイントはいつごろのどのようなことでしたか。

A：少しずつゆっくりと変容していますね。少しずつよくなっています。

Q：農業の様子などは大きく変容してきていると思いますが、どうでしょうか。

A：その通りです。

Q：子どもの生活も変容していると思いますが、村長さんが子どもの時と比べるとどんなところが一番変わったと思いますか。

A：昔と今の子どもはどこが違うかと言うことです。昔は何もありませんでした。今の子どもたちには教育があります、ラジオや電気もあります。昔とは大違いですね。13-14年前まではバスに乗ったこともありませんでした。街に行くにも歩いて行くしかありませんでした。

Q：今の子どもたちは月に何回くらいウボン市のような街に行くのでしょうか。

A：まだ、少ないと思いますよ。両親と一緒に

いくとしても……一度もない子もいると思います。もしかしたら、バスに乗ったことがない子もいるかも知れませんね。

Q：今、1家族あたりの子ども数の平均はいくらくらいでしょうか。

A：7人くらいでしょうか。

Q：村長さんが子どもの時は何人兄弟でしたか。

A：7人兄弟でした。

Q：子どもさんは何人ですか。

A：男5人、女2人の計7人です。

Q：どうもありがとうございました。大変参考になりました。

A：また何かありましたら何でも気軽に声をかけて下さい。

その後、御礼の品物を手渡し、みんなで写真を撮って村長宅を失礼した。校長先生と村長さんへの表敬が快い承諾のうちに無事終了、ほっとした気持ちで外へ出ると、夜の闇がすっぽりと村を包んでいた。人通りのない静寂の村を歩いていると、高床式の住居からテレビを見ているのであろうあかりと大人たちの声が時折聞こえるだけで、子どもの気配は感じられなかった。学校へ戻る小道を右へ曲がったとき、カチカチと石を打つ音が聞こえてきた。何だろうと近づいてみると、高床式の住居の下の部分で、子どもたちが集めてきた王冠を薄暗がりの中で叩いて潰している音であった。「何をやっているのか」尋ねてねてもらおうと、「駒を作っている」のだと言う。遊び方を聞いてみると、王冠を潰して円盤様の駒を作り、それを地面に掘った直径5センチメートル位の穴に投げ、うまく入るかどうかを競うものだ、実際にやって見せてくれた。その子の隣では小学校低学年くらいであろう弟が、地面に散らばったコークやスプライトなどの王冠の中で依然カチカチと石でそれらを潰していた。

学校へ帰りつくと、誰もいない夜の学校は活動的な子どもたちで溢れる昼間の学校とは対照的にひっそりと静まり返っていた。我々の第1

日目は見るものすべてが始めてであり，次から次へと好奇心に駆り立てられ，ただひたすら欲張りにそして夢中に見聞きしてきた1日であった。そのせいか正直なところ疲れ果てていた。早々に部屋に入り，整理されずそのままになっていた荷物を片付け，用務員さんに借りた布団を敷いた。ちなみに，日本では北枕はよくないとされているが，タイでは西枕がよくないとされているようだ。布団の上にとっかかりと腰を下ろすと，今日1日の興奮がまだ冷めやらず，しばらくボーッとしていたが，明日は早朝に起きて村の様子を観察せねばならんことを思いだし，歯を磨いて少々早い床に着いた。

5. 村の朝

昨夜は疲れていたせいかさほど寒いとは感じなかったのであるが，朝方寒さのために目が覚めた。時間は覚えていないが，外はまだ暗がりの闇であった。私は暗闇の中で靴から長袖のシャツと長ズボンを取り出し，寒さに震えながらそれらを着込み，身体を一段と丸めて再び眠りについた。タイの季節は大きく雨季と乾季に分けられ，乾季のうちでも12月から1月にかけては比較的涼しい季節となる。バンコクを出発するとき，カウンターパートのスッティ先生から，「今年のウボン市は例年になく寒く，寒さのために多くの野犬が死んだ」という話を聞いていたが（実際にはウボン市で犬が死んだとは誰にも聞かなかつた），ウボン市ではホテルにいたせいでそれほど寒さを感じることはなかった。しかし，農村で迎えた朝は毛布一枚では過ごせないほどの寒さであった。この寒さのせいでウボン市に帰ってから発熱し，二日間不安な日を過ごした。再び目を覚ましたのは，午前6時10分ころであった。外は徐々に明るくなりかかっていたが，まだ東の空に太陽は姿を現していなかった。早速床を抜け出し，同行のスプラディット先生を伴って朝の村の様子を観察するためにカメラを持って出かけた。

思いもよらなかつた朝の寒さに震えながら，

村の通りを歩いて行くと各家々では敷地の中で小さな焚火をしていた。焚火の周りでは，子どもたちがもっと服を着ればよいのと思うほどの薄着で，大抵の場合Tシャツに半ズボン程度で寒そうにうずくまって暖をとっていた。残念ながらこの火で朝食の用意をしたかどうかは確認できなかった。垣根の向こうの畑では，野菜類に水をやっている子どもと母親の姿があった。また，水牛を連れて村を出て行く大人たちを数多く見かけた。村のはずれまで来たとき，畑の方からナンサティク（日本ではパチンコとかゴム銃と呼ばれている二股になった木の枝にゴムをつけ，これで石ころを飛ばす道具）を持った少年が帰ってきた。多分水牛を草場（田や畑）へ連れて行った帰りであろう。少年が帰ってきた道を歩いてみることにした。しばらく歩いたところで，畑に水をやる4人家族がいた。両親と下の弟がバケツに汲んできた水を唐辛子の苗木1本1本にやっていた。畑の隅には小屋があり，その側にはポンプ式の井戸があって，小学校を既に卒業していると思われるくらの兄が水を汲み上げていた。我々は挨拶をして畑を見せてもらうことにした。畑の広さは2反程度で，唐辛子，すいか，パクブン（空芯菜），あさつき，にんにく，バジル，パクチー（コリアンダー），なす，胡瓜などが植えられてあった。断って胡瓜を食べてみた。短くてやや丸みを帯びたそれは，あまりアクがなくてみずみずしいおいしさであった。畑をあとにして村へ帰る途中，弁当籠を持った小学校1年生くらいの男の子に出会った。スプラディット先生によれば，畑で両親が蒸したカウニャウを村の家まで届けているところだという。少年に籠の中味を見せてもらったら，炊きたてのおいしそうなご飯が湯気を立てて入っていた。今は乾季で両親が村で生活しているのであまりこうした光景はみられないが，雨の降る農繁期には大抵の子どもが弁当を持って畑の小屋と村の家をよく往復するという。東の空が太陽に焼けて赤く染まっているころ再び村へ帰ってきた。6頭ほどの水牛を連れ

た男が草場へ向かう途中であった。水牛の群れの中には生まれて間もない赤ん坊が母親のあとを遅れまいと他の水牛たちに囲まれ守られながら歩いてた。

水牛の一群を注意して見ると、15メートルばかりの綱を引っ張った水牛が数頭いる。すべての水牛に綱が着けられているわけではない。この綱は草場に着いたとき、逃げないように大きな木や切株に結び付けるためのものである。おそらく、群の中心的な数頭を結わえておくだけで用が足りるのであろう。村のある家ではラジオが大声でニュースを伝えていた。その隣では、相変わらず寒そうにうずくまって焚火にあたる少女の姿があった。また、制服を着て大きな籠にジュウロクササゲをのせて戸口を回って売っている少女に出会った。値段は握りきれないほどの一束が1パーツであった。なんと安い値段なんだろうと、ただ驚くばかりであった。

スプラディット先生が学校へ帰ると言うので、私はひとりでもう少し村の中を歩いてみることにした。家と家の細い路地を入ったところに、豚を飼っている家があった。中くらしい豚が3頭飼われていて、小学校低学年と思われる女の子とその母親が世話をしていた。豚の餌は米ぬかで、水を与える装置がちょっとしたアイデア器具であった。瓶から伸びたホースの先に蛇口がついていて、豚が押すと水が出る仕掛となっていた。

しばらく村の小道を散策していると、よそ者に興味をもってか、小柄な男が声をかけてきた。振り向くとその男は自転車をおし、この村には珍しくちょっときれいな身なりをしていた。私もタイ語で挨拶をすると、「自分は村長助手で、いま手紙を配っているところだ」と話しかけてきた。あちらこちらで雄鶏たちが「コケココー（タイ語ではなんと表現するのか分からないが、日本人の私にはこのように聞こえる。）」と鳴く朝らしい村の道を彼と並んで歩きながら、自分の紹介やら、村の様子やらの話をした。朝早くから糶を脱穀する人たちに挨拶をし、中

学校へ通う自転車部隊を見送り、高いスピーカー⁵⁾の立てられたお寺の中を抜けて、彼の家の縁台に腰を下ろした。彼の家は村のメイン通りに面したお寺のとなりであって、二階建ての結構立派な家である。彼には4人の子どもがいて、長女は既に結婚をして一緒に暮らしている。彼女には男の子がいる、ちょうど私たちが話しているとき、彼の末っ子と一緒に現れて焼いたカウニャウを食べていた。長男は高校へ通っており、次男も中学に通っている。村では珍しい高学歴一家である。彼の話によると高校生は村全体で10人前後、中学生は30人前後だそうだ。

6. 朝の学校

一番最初に学校に登校して来るのは、掃除当番のようである。クラス毎に当番が決まっているらしく、みんなが登校する前にやって来て、教室や廊下を箒で掃いて掃除をしている。時間は午前7時30分ちょっと前である。掃除が終るといったん家に帰り、食事をして来る子どももいるようである。なかには学校前の駄菓子屋でなにやら買って食べている者もいる。そうしているうちに少しずつ子どもの数が増えてきて、にわかには学校が賑やかになってくる。当番以外の子どもたちは集団登校でやって来る。いくつかに分けられた地区ごとに集合場所があり、そこへ集合した後に6年生のリーダーが先頭になって長い竹の棒をもち、年長生から順に一列に並んでやって来る。校門を入るとすぐ右手の学校事務所の壁に据え付けられている仏像に合掌をして挨拶をする。女子は合掌して左足をひいて膝を曲げ、男子は合掌してチョコンと頭を下げる。今日は私たちに気を取られる子どもが多いせいか、半数以上は挨拶を忘れて通り過ぎて行った。午前8時ころまでに殆どすべての子どもが登校を終える。学校へ来るとそれぞれの教室へ行き、鞆と（殆どの子がカウニャウだけの）弁当を置いて、再びグラウンドへ出てきて、気のあった仲間と思ひ思ひの遊びをやっている。どこの子どもたちでも同様だと思うが、遊

びには流行があるらしい。男子の多くは石ころ当てと、サッカーをやっている。女の子は鬼ごっこやクラターイ・カー・ディヤオ（片足のウサギという名前のケンケンでの鬼ごっこ遊び）、タウーイ（絵描き鬼の一種）を主にやっている。なかには何をするというわけでもなく、ただボーッと立っている児童やゴム草履を手を持って走り回っている子もいる。注意深く観察してみると、特定の遊びをやっている子ももちろんいるが、何をするというわけでもなく遊んでいる者、例えば、鬼ごっこをやっていたかと思うと次の瞬間喧嘩になっていたり、一緒にやっていたはずの者が遊びを変えてしまったために取り残され、別の遊び相手を探している者など、遊びの種類と人数が絶えず変化していて、何とも捉えにくいのが実態のようである。低学年生たちは、高学年生の遊びを眺めている子が多いように思えた。ちなみに、この小学校では午前8時丁度に国歌は流れなかった。⁹⁾

午前8時35分になると鐘が鳴らされた。この鐘がなると掃除の時間となり、子どもたちは校庭に落ちたゴミや落葉を拾い始めた。拾ったゴミは所定の場所へと運んで行く。この時間になると、明け方の寒さが嘘のように暖かくなり、その証拠に子どもたちは専ら日陰で作業するようになっている。5分後に再び鐘が鳴らされた。鐘がなると子どもたちは国旗掲揚台の前に集合・整列し、朝礼が始まる。国旗掲揚台に向かって右から6年生、5年生と順に並び、「トロン・ナー（前に倣え）」の合図で右手だけを挙げて列を整える。列の前には進行係が2名、国旗掲揚係が2名、そして鐘を鳴らす係が1名既に配置についている。掲揚係が国旗を保管庫から持ちだして（8：45）、先生の協力も得て綱に結び付けると、鍵がならされる（8：48）。進行係のひとりが第一楽節を歌ったのに続いて全員で国歌を斉唱し、掲揚係によって揚げられる国旗に注視する。国旗掲揚が終了すると、全員がワイイをし、進行係にしたがって仏教経文の一部が唱和される（8：49）。そのあと国王と王妃を讃え

る歌が合唱され（8：50）、再び進行係に従って朝の誓いを全員で唱える（8：53）。今度はワイイはしていない。誓いに続いて落し物係が前に歩み出て、昨日の落し物、忘れ物を公開する。幸いこの日はすべての物が持ち主の元へ返った。その後、ニュース係が前に出て、その日のトピックスを読み上げる（8：55）。先生の話が終る（8：56）と朝礼は終了して、列毎に教室に帰って行った（8：57）。タイでは朝礼時の先生のお話は、校長先生ばかりに限られているわけではない。朝礼が毎日行われるせいもあるだろうが、先生たちひとりひとりのトレーニングともなっているようだ。

7. 午前の授業

教室へ戻ると正午までが午前中の授業となる。タイ国では小学校の授業単位（カーブ）は20分と定められていて、授業は通常3カーブを1時限として実施される。この学校でも多くの学校と同じように休憩時間が設定されておらず、担任の計画および授業の進行状況に合わせて臨機応変に区切られている。各教室で午前中の授業風景を観察させてもらった。教室の配置は図2に示すとおりである。

幼稚園年長組の担任は女の先生である。教室にはタイ国の伝統の礼儀作法を示したポスターや児童の手による作品が飾っており、教室の中ほどに置かれた机を取り囲むように4から5人が椅子を置いて座っている。見学したときには先生の回りに集まってなにやらお話を聞いていたが、私を見つけるなり彼らの注意が散漫となった。授業の邪魔をしてしまったようだ。廊下にはサンダルが並べられていた。

隣は1年生の教室である。担任は男の先生で、ちょうど国語の時間らしく先生の後に従ってタイ文字の読み方と発音の練習をしていた。児童は黒板に向かって2人がけの机に前向きに座っていた。田中君が訪れたときには、ノートを床において横座りの姿勢でノートをとっている児童もいたそうである。1年生の隣は保健室兼



写真2 校庭で遊ぶ子どもたち

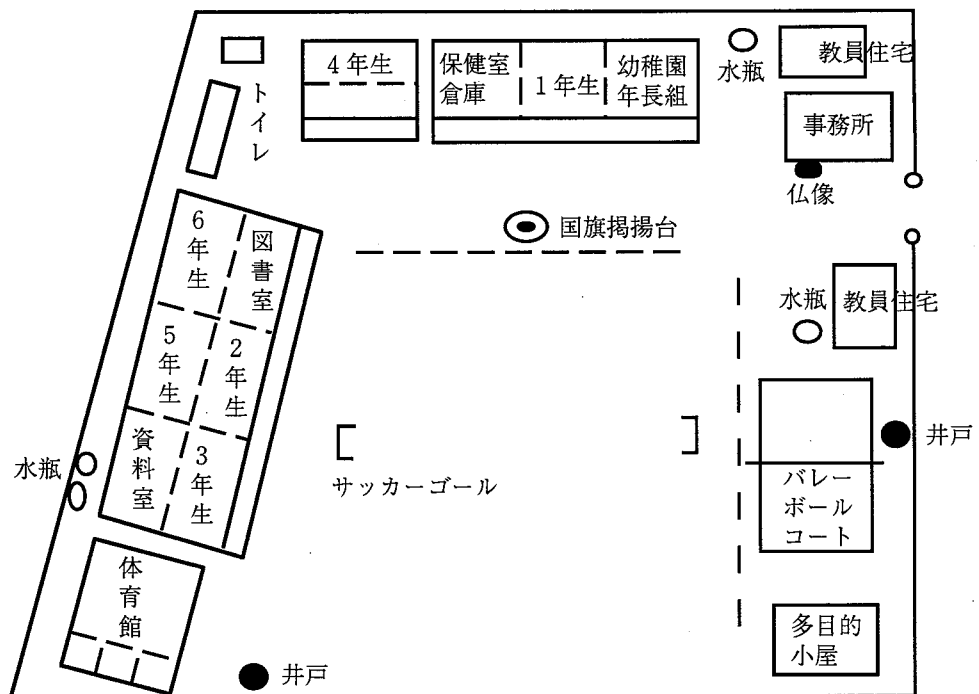


図2 ノーンガンホーイ村小学校見取り図

倉庫になっている。ベットが2つ置かれてありその上には蚊帳が吊られている。訪れたときは誰もいなかった。ベットの脇には予備のゴザ、枕、毛布がきちんとたたんで置かれてあった。また、赤チンやオキシフルがむき出しのまま床に置かれてあった。その他には、サッカーボールや空気入れ、バケツの類が置かれている。国旗もここに保管されている。この校舎は壁で3部屋に仕切られているが、天井部分ではつながっており、となりの声がよく聞こえる。

4年生の教室は1部屋だけの建物にある。ちょうど校長先生による授業中で、全員が静かに話を聞いていた。机の上にはノートや教材が出されてあったが、訪れたときにはただ話を聞いているのみであった。黒板は使用されていなかった。机は2人がけの長机で、黒板に向かって並んでいた。私のせいで児童のみならず、校長先生までがやや緊張しているように思われた。

4年生と新校舎の間には児童用のトイレがあり、扉には番号がふってあった。

2, 3, 5, 6年生の教室は新しい鉄筋二階建ての新校舎にある。1階の廊下はコンクリート張りのオープン廊下である。グラウンドからみて一階右端の部屋は図書室となっている。しかし、たくさんの本が揃っているわけではなく、中はがらんとした予備の教室といった感じであった。

2年生の担任は女の先生である。机と椅子は新しいパイプ式で、互いに机を向かい合わせたグループ学習形式の授業やっていた。先生は黒板横の自分の席に座ってなにやらお仕事中で、なんとなく自習をやっている感じであった。

その隣は3年生の教室である。私がビデオを持って現れるとどよめきが起こったが、先生(男)に叱られてすぐに静かになった。黒板には問題が書かれてあり、その問題を解いている最中のような感じであった。机は木製の古いひとりかけ用で、グループ学習の形態で座っていた。

階段を上って最初の部屋は資料室・会議室で

表1 生徒数

クラス	男子	女子	合計
年長組	12	15	27
1	17	14	31
2-A	10	10	20
2-B	6	13	19
3-A	9	11	20
3-B	9	17	26
4-A	11	7	18
4-B	11	8	19
5	15	15	30
6	13	14	27
合計	113	124	237

あった。入って右手の黒板には生徒数や各種の学校資料が数字で示されていた。それによると、2, 3, 4年生は正式にはそれぞれ2クラスに分けられていた(表1)。教室の数や先生の数の都合で各学年とも1クラスにまとめられ、授業をやっていると思われた。

5年生の教室にはミシンが置かれてあった。先生は男性でちょうどお話の最中であった。教室の前の廊下には木で作った2段の棚にきれいに履き物が並べられていた。

6年生の教室は先生不在であったが、静かにグループに分かれて自習をしていた。学習内容は算数で、副教本の問題をノートに解いていた。グループは同性同士で構成されていた。

新校舎の隣には、今年建てられた小さな壁のない多目的体育館がある。雨季の授業を考えると待ち望まれていた施設であろう。床はコンクリート張りである。体育館には倉庫が3つある。奥の倉庫は壊れた机や椅子がしまわれており、表側の倉庫には棚があって先月訪れたときに贈ったお菓子の缶が置かれてあった。この建物と教室のある二階建ての新校舎との間の裏手に雨水を貯めるために作られたコンクリートの土管をつなぎ合わせたタンクがある。

新校舎の内部の壁はすべて白く塗られており、木造校舎に比べると一段と明るく感じられた。黒板は前と後ろにそれぞれ備え付けられて

いた。この学校には特別教室が見あたらない。学習に使用される器具や教材・備品は校門横の事務所に備えられているが、実験器具などは実習用というよりはむしろサンプル・標本として陳列されていた。タイ国の小学校はどこを訪れても日本ほどに教材が揃っていない。どこの学校を訪れても言われる予算不足の現実である。それを補う意味なのかどうか、文具店に行くと日本ではみられないほどの教材用ポスターが売られている。しかし、この村にあっては、それを売る店もないが、おそらくそれを購入する経済的ゆとりもないであろう。

正午になると鐘がなり、午前の授業が終了する。子どもたちは教室から出てきて、校門前の仏像にワイイをしてぞろぞろと自宅へ帰っていく。火曜日と木曜日には給食が用意されるそうだが、それ以外の日は自宅で食事をする。しかし、全校児童のすべてが自宅に帰るわけではない、村の外から来ている子どもたちは家に帰って来る十分な時間がなく、教室で持参した弁当を食べるのである。自宅での昼食を終えた子どもたちは学校へ戻ってきて、午後の始まる時間まで思い思いの遊びをしている。我々は用務員さんと先生たちの協力で食事を作り学校事務所にて昼食をとった。

8. 小さな国際協力

午後の授業は午後1時に始まる。午前の授業が国語や算数などの基本的教育(いわゆる「読み書き算盤」)であるのに対して、午後は美術や体育・職業教育などの実技系・実習系の授業が中心となる。5年生は、椰子の葉を使ったハンドクラフトの授業が行われ、また、幼稚園年長組は大半が外遊びの時間となった。

ノンガンホーイ村小学校の子どもたちの履き物はゴム草履である。子どもたち全員が集合したときにカウンターを持ち出して数えたところ、全校児童中138名がゴム草履を履いていた。靴を履いているものはひとりもおらず、残りの者は裸足であった。ゴム草履を履いている者を

年齢別にみると、高学年に多く、低学年ほど少ないようである。ゴム草履を履いている者の割合は、昨年正確な数字を得ていないので正確性に乏しいが、昨年よりも増加していると思われた。しかし、靴を履いている者はおらず依然として裸足の者も多い、これは疑いもなく、経済的な理由によるものである。授業時の履物について触れるならば、教室では全員履物を脱いでいる。草履という性格上靴下を履いている者もない。もっとも日本のように寒いことはなく、その点での問題は無い。体育など外での授業は子どもたちに任されており、なかには草履を履いている子もいるようだ。しかし草履は走るのには適しておらず、ほとんどの子どもはそういう時には裸足となる。いずれにしても、安全上問題のない芝がグラウンドに植えられているわけでもなく、登下校に際しては村内の道路を歩くわけであり、何等かの方法はないものかと思う次第である。

草履の話を生先生としている時に、私は日本にある藁草履のことを思い出した。もし私が藁草履を作ることができたならば、藁草履の作り方を教えてあげるとができる。幸いタイには藁が豊富にあり、作り方だけ分かれば実用性の高いものと考えられる。しかし、問題は私が作り方を覚えているかという問題であった。子どものころ近所のお年寄りが作っているところを見ただけで、実際に自分で作って履いて使ってみたことがないのである。ところが、授業としてそれをぜひやってほしいと言うことになったのである。最初、私は作れる自信が無かったので断っていた。しかし、なんとかしてあげたいという気持ちが勝って、何とかなるさという軽い気持ちで作り方を見せるだけという条件で引き受けた。話がまとまったのが授業がまさに始まらんとする時であったので、随分と緊張してしまった。近くの農家へ行って藁を分けてもらい、それを井戸でよく水に浸して不用な部分を除き、藁の束を持って授業に臨んだ。私自身試行錯誤の段階にあるので、それを教えながら作るとい

う作業がいかに大変だったかは、「揉むように」とか「こよるように」とかいった手の動きを説明するタイ語や英語を知らないということだけを考えても容易に想像できるであろう。まず細い縄作りから始まった。数本の藁をとり、端が解けないように結んでそれを足で抑え、二つの掌を擦り合わせて縄を絞ってていくのである。私はうまくできた。しかし、生徒たちは先生も含めてできなかった。藁の持ち方から手の動かし方までよく見てもらいスプラディット先生に説明してもらったが、挑戦をした十数名のうち何とか縄を作れたのは女の子ひとりだけであった。この実験で2つのことが明らかになった。第一は、手で縄を絞う文化が少なくともこの村にはない。第二に、したがってこの村には藁縄もないということである。私が作った2本の縄と女の子が作った1本の縄で3つの草履作りに作業が進んだ。私の作った縄の一本は先生に譲って先生に挑戦してもらった。このステップでは、作った縄を藁草履の形にして、それに藁を交互に通していき草履の底の部分を作る作業である。ここで私は失敗をしてしまった。藁を通し始める位置を反対から始めてしまったので

ある。おかげで最後に縄を絞って仕上げをするときに随分と余分な時間を費やしてしまったのである。最後は鼻緒をつける作業である。このステップは縄を応用してなんとかうまくいった。約1時間を要して、片方だけは完成することができた。できあがった物は私が作った子ども用の小さな草履と、先生の作った細長い、実用には向かないが、初めて作った今後へ向けての試作品である。女の子は時間の関係で途中断念し、未完成のままとなった。私自身できるかどうか不安な取り組みであったが、一生懸命教えた甲斐あって、苦勞しながらも作り上げることのできた先生には大変喜んでもらった。嬉しいことに、ぜひ自分でも作れるようになって、子供たちが裸足で歩かなくてもいいようにしてやりたいと嬉しそうに語ってくれた。

9. 放課後

藁草履作りに奮闘している間に時間がどんどん流れて、下校の時間となった。ノーンガンホーイ村小学校の下校時刻は午後4時である。幼稚園年長組から6年生まで集団下校である。朝礼時と同様、国旗降納に際して全校児童が掲揚台



写真3 藁縄を作ってわら草履を作る

の前に整列した。国旗は全校児童が見守るなかで静かに降納された。係の児童が国旗を保管部屋に納めると同時に、通学班別に並んでいた児童が列毎に下校を始めた。もちろん仏像の前では、(今日1日が有意義に過ごせたことを感謝して)きちんと挨拶をして帰って行く。

しかし、すべての生徒が帰ったわけではない。放課後サッカーを習っている30名ほどの男子がいる。この学校に運動クラブはない。彼らは、4年生以上のサッカーの比較的上手な希望者たちである。幸いこの季節は農閑期であって放課後にサッカーをする時間的余裕がある。今年新しく赴任してきたウィラサック先生のアイデアで、彼自身が指導に当たっているのである。時間は午後4時から5時(時には6時前)まで行われる。子どもたちは裸足になり、元気よく大きなサッカーボールを追いかけている。裸足でボールを蹴ってよく痛くないものだなど驚かされながら、我々も一緒にサッカーをさせてもらった。

サッカーが終ると子どもたちは鞆を持って帰って行く。私は子どもたちについて行き、夕方の仕事を見せてもらうことにした。学校前の

家では、女の子が妹たちの面倒をみながら、水汲みをしている。その家の隣からは、タクロールを使ってバレーボールの真似をしている女の子が通りに出てきた。しばらく行くと、先ほどサッカーをやっていた少年が、畑仕事をしていた。畑の間に小屋があり、その脇にポンプ式の井戸がある。そこから水をブリキの如雨露に汲み上げ、農作物に一本一本にたっぷりと水をやっていた。畑に植えられていた作物は、タバコ、唐辛子、パクブン、バジル、とうもろこし、ジュウロクササゲ、あさつきであった。畑はあまり広くなく、量も少ないことから自宅で消費するだけの畑であるとすぐに分かった。作物の種類を調べていると、水を汲んだバケツを竹竿の両端に吊し、重そうだが慣れた足取りで帰ってきた女の子がいた。集まってきた子どもたちに頼んで、彼女が水を汲んでいる井戸へ連れて行ってもらうことにした。乾いた稲の切株の残る田圃の畦道をどこへ案内してくれるのか楽しみにしながら子どもたちの後に従った。田圃には乾いた割れ目や畦際に直径10~20センチメートルの穴が幾つも見られた。何だろうと子どもにも尋ねてみると「蛙を捕まえた跡だ」と教



写真4 井戸の回りで農作業をする子どもたち

えてくれた。そういえば市場で売っている蛙を見たことがある。子どもたちに確認はしなかったが、捕まえた蛙はお腹に入るのだろう。道案内の子どもたちに毎日の生活時間や遊びについて質問をしているうちに井戸へ着いた。最初は着いたと言われてもよく分からなかったが、子どもたちが覗き込んでいるので、それが井戸だと分かった。田圃の端の方に木で枠を施した四角い井戸がぽっかりと口を開けていた。自家用の井戸を持たない家では、こうした集落の外にある井戸を利用して、朝夕に大瓶を満たすべくやって来るのであろう。「他にもあるか」と尋ねると「ある」と言うので、また子どもについて歩き出した。訪れたところは井戸ではなく、ため池であった。まん中を掘り出したためであろう池の周囲は周りの田圃よりも一段と高くなっており、竹が植えられ、有刺鉄線が張り巡らされていた。個人かあるいは数人のグループで所有しているであろう。池を離れ田圃の中を歩いていくと、脱穀のあとであろうか、藁が積み上げられていた。そうこうしているうちに、子どものひとりが駆け出した。「どうしたのか」と聞くと「水牛を連れに行った」という返事であった。子どもたちの数は、少しずつ膨れ上がっていつの間にか幼児を含む20人くらいの人だかりとなっていた。突然泣きだした幼児をあやす子どももいた。数人の者はナンサティックを腰に挿しており、それを使ってマカムの実を落として、ちょっと酸っぱいけどどうだご馳走してくれた。村へ着きかかったころ、一面の唐辛子畑が目にとまった。結構広い畑である。商品として作っていることがすぐに想像された。そこでは直径4センチもあるだろうホースで電気ポンプから組み上げられた水が勢いよく作物に撒かれていた。畑を眺めしていると、再びバケツいっぱい水を汲んだ女が村へと帰ってきた。子どもたちに別れを告げ、ひとり宿舎へと帰って行った。村には大人と子どもたちが入り交じって朝でもない、昼間でもない1日の終わらしいほのぼのとした光景が展開されていた。宿舎へ

帰ったとき、西の空が真っ赤な夕日で染まっていた。たぶん明日も晴れだろうと思った。

10. 夕方の情景

夕飯は校長先生宅に招かれていたので、水浴びを終え、同行して下さるウィラサック先生を待って、夕暮れの迫る村の中を抜けて校長先生の家へと向かった。準備ができるまで、用務員さんの家で待たせてもらうことにした。すいかをご馳走になった。通りや家の前では仕事から帰ってきた村人たちが幾分賑やかであった。バイクの後ろに奥さんを乗せて帰ってきた夫婦、自転車に乗った若者、目に涙を溜めてお兄ちゃんに慰められている幼児、水浴びを終えて腰に布を巻き付けただけの男などいつもと変わらない風景であろう。村長も出てきて、向いの主人となにやら話している。こうして(いつものように)辺りが暗くなっていった。

準備ができたというので校長先生宅を訪れた。家の前に置かれた瓶の水で手を洗い、コンクリート張りの日本風に言えば土間(隣には、車が置いてある)の上にゴザを敷いた簡易接客用テラスに挨拶をして腰を下ろした。何を飲むかと言われたので、遠慮気味に「メコン(最も人気のあるタイ国産ウイスキー)があれば」と答えると、戸棚の奥からメコンを出してくれた。バンコク辺りでは安い酒でも、この村では結構高価で貴重なものなんだと些か後悔していると、奥さんが氷を出してくれた。この村には冷蔵庫のある家は数軒しかないが、校長先生宅では氷を作って売っているようであった。校長先生宅では氷ばかりではなく、ちょっとした雑貨も売っている。石鹸や洗剤、調味料、薬品、針や糸などが玄関に入って右側の棚にズラッと並べられていた。表通りには村で一軒しかないガソリンスタンドも経営している。といっても大きなドラム缶を2本置いた汲み上げ式のものである。

メコンを飲んでいっているうちに鶏のスープと血の入った鶏の腸の細切りラーブが運ばれてきた。

ご飯はウルチ米であった。私は、校長先生がご馳走してくれるというので内心期待していた。しかし、認識が甘かったことにすぐ分かった。ここは市街地ではないのである。田圃のまっただ中にある小さな村なのである。都市的な物資で溢れる市場とは遠く離れた世界なのである。それに気づいたとき食事の見方が少し変わってきた。最初に感じたのは、「何だこれが接待料理か」であった。そして今は、我々のためにわざわざ貴重な鶏を絞めて作ってくれたんだな、ご飯だってカウニャウ(モチ米)でなく、カウスーウェイ(「白い米」という意味でウルチ米をこう呼ぶ)である。たぶん一級のお客料理なのであろう。冒頭でも述べたが、村の食生活は我々の想像をはるかに越えたものである。確かに米はある。しかし米しかないのである。米が主食であり、米が食事のほとんどすべてなのである。ウィラサック先生は、遠慮してナムチム(唐辛子の漬け汁)だけでご飯を食べた。

酒が進んだ頃、ウィラサック先生のラーオ語講座が始まった。また来るために帰国しても練習できるように録音してほしいといってテープレコーダーを手渡すと、ますます調子が出てきたようで、普段はあまり使いそうにない極端で大きな表現まで飛び出し、集まってきていた村人たちから笑いをとっていた。ユーモアのセンスのよい田中君は「それはラーオ(lao=ラオス)語でなくてラオ(lao:酒)語じゃないですか」と言うと同大爆笑であった。こうして楽しい時間が過ぎていった。我々はあまり遅くならないように、午後9時に御礼を言って校長先生宅を後にした。ほろ酔い気分の帰り道、満天の星空を見ながら3人で肩を組んで「(タイ国では人気のある)スバル」を歌った。

11. 土曜日の朝

2月3日は土曜日である。タイ国の学校は週休2日制を採用しており、土曜と日曜が休日である。休日の子どもの生活を観察するために、昨日同様、日の出前に寢床を抜け出して外へと

出かけた。村の朝は昨日と同じく、よく晴れた肌寒い朝であった。今日もよい天気になりそうだった。日本では晴れることをよい天気と呼んでいるように思うが、タイでは気温の上がない涼しい天気をよい天気と言うらしい。水牛を連れて歩く人を見るにしても、畑に水を撒く人を見るにしても、朝はなんとなく慌ただしい。平日と休日に分けて何日も調査を続けてきたわけではないので、今日の朝が休日らしいかどうかは分からないが、平日と休日とで朝の仕事に違いがあるのなら、いずれ判明することを期待して今日の観祭をすることにした。昨日の夕方に畑に水を撒いていた少年に再び出会った。今日は何をやっているのかと近づいてみると、とうもろこしの株の周りに穴を掘っている。どうやら、その穴に水牛の糞を堆肥として埋め込んでいるらしい。向こうの畑では女性が水牛に鋤きを引かせて、田を鋤いている。女性は鋤きの所にいて水牛の後をついて歩くだけだが、水牛は田を鋤いているのが分かるらしく実にうまく鋤いている。隣りの田圃では若者が鋤で耕している。水牛に引かせた鋤きで起こした土の塊を叩いて潰しているのだ。水牛を連れて少年も、水を汲んでくる女も、私には分からない村の生活リズムに沿って、いつも通りの朝が予定通りに過ぎているだけなのだろう。村の中を歩いてみると建築中の家の脇では大人たちの見守る中、子どもたちが鋸を持って木を挽いていた。妹を抱いて歩く少女もいれば、手押し車に妹を乗せて押して行く幼女の姿もある。学校へ行く平日なら既に制服を着て集合場所に集まっている時間なのにと思いを馳せていると、同じ子どもたちで溢れる村の朝の中に、どこことなくゆっくりと始まる休日の朝を感じるのであった。

12. モーラムを訪ねて

宿舎へ帰り、昨日の残りのパンを七輪であぶって焼き、タイ風オムレツを作りを、コンデンスミルクをたっぷり入れたコーヒーを飲んで朝食を済ませたころ、スプラディット先生が

帰ってきた。氏はボクシングのレフェリーを隣郡のワリンチャムラップ市で行うために、昨日の午後に出かけ今朝帰ってきたのである。今日は、近くのカエーク村で毎年行われている伝統行事のモーラムを見に行くのである。赤いオンボロのトラックに乗った先生仲間が迎えに来た。村の出口で若者たちを乗せ、田圃の中をどこまでも続く赤いラテライトの道を凹凸に揺られながら走って行った。しばらく行くと、モーラムへ向かう一団が木陰で休憩していた。子どもあり、女ありの奇妙な一団である。我々は後ろの荷台に乗っていたが、危険だからと促されて前のシートに乗り込んだ。よくも乗れたなあと思うほど車は沈み込んだが、再びなお一層ゆっくりと走り始めた。ギャップの多いところでは車は左右に上下に大きく揺れながら、いくつかの村を抜けて走っていった。川にはいかにも手作りといった感じの弱々しそうな丸木橋がかかっている。その上を恐る恐る渡っていく。幾つものカーブを曲がって、ノーンガンホーイ村がどちらの方角だったか分からなくなったころ、やっと村の入り口まで来たのであった。また、あの子たちも乗せて行くのだろうかと思っていると、ちょうど彼女たちの前で止まった。もうこれ以上はとても乗り切れないだろうと思っているとき、彼女たちの前でなぜ止まったかが判明した。彼女たちは、モーラムに来る人々に花を売って歓迎しているのである。実際に(紙の)花に対してお金を払うのだが、「売る」という言葉は当たっていない。モーラムに来た人々を歓迎して花を贈り、花をもらった人はタンブン(寄付を施す)なのである。形式的には赤い羽の共同募金と同様の行為とみなせるが、自分自身の徳を積むために花を買うという点ではその意味が違っている。彼女たちは寺女と呼ばれモーラムを開いたお寺の使者として客人を歓迎しているのである。客人から集められたお金はそっくりお寺に寄進される。ちなみにたくさん花を買った人ほど徳が高いとされるのである。車は約1時間をかけてカエーク村に着いた。村

のまん中で便乗客を下ろし、我々は同村小学校の先生宅へお邪魔することになった。

友人の先生の家で最初に出されたものはサートーと呼ばれるタイ風のどぶろくであった。聞けば家庭で造ることは禁止されているが、祭りのための密造されたものであった。米から造られたこの酒は白濁しており、中にまだ米粒が残っている。味は甘酸っぱく日本の酒と同類と思われた。先生同士で話が盛り上がっていたので、私は失礼して酔いざましがてら隣の小学校を見せてもらうことにした。規模も校舎の感じもだいたいノーンガンホーイ村小学校と同じくらいであろう。広いグラウンドを取り囲むように校舎が立てられている。グラウンドの脇の大きなマカムの木の下に作られた椅子に腰を下ろした。マカムは英語ではタマリンドと呼ばれ、料理に使われるほか生食もできる甘酸っぱい木の実である。日向では直射日光が照りつけてとても熱く感じられるのに、大樹の木陰を吹き抜けて行く風は実にさわやかであった。祭りのせいか学校には誰もいない。平日の様子はどんなだろうとグラウンドや教室を眺めては、聞こえて来るだろう子どもたちの声を想像していた。しばらくここに横になって時間を過ごしたが、正午が近づいたので先生の家へ帰った。二階ではまだまだこれからという感じで盛り上がっていた。そろそろ出かけるから食事をしろと言われて、とうもろこし入りのモチ米の蒸し菓子、鶏の膝の唐揚げ、カノムチーン・ナムヤー(唐辛子スープで食べるタイ風ソーメン)を食べた。

全員で連れだって外に出ると燃えるような暑さが頭のとっぺんを焦がした。こんなに熱いお祭り見物は生まれて初めてである。モーラムの会場であるカエーク寺へ近づくにつれ、大勢の人だかりが軒先や木陰で酒を酌み交わしている光景を多くみるようになってきた。寺に足を踏み入れると、広い境内にステージが組まれ、それを取り囲むように大勢の人が座り込み酒を飲みながら、あるいは語らいながらモーラムを楽しんでいた。モーラムとは本来ケーンという笙

の伴奏に合わせて男と女の2人の唄い手が掛け合いで即興に演じる民謡である。東北地方で行われる一種の雨ごい、収穫の儀式の一形態であった。カエーク村でのモーラムは、既に電気仕掛けのエレキバンドが入り、ショー化されていた。ステージは若い数名の男女で構成されており、女たちはミニスカートを履いて歌に合わせて踊っている。現代風なのであろうが、どうも馴染まない感じであった。いつからこんなスタイルになったのかと先生たちに尋ねてみたが、正確に答えられる人はいなかった。近くに座っていた若い女の子に話を聞くと、「このモーラムを見るために歩いて兄弟と友だちでやって来た。とても楽しい。」と話してくれた。祭りに集まって来るのは若者だけではない。警察官もやって来る。ライフルを下げている人も、私服の人もいる。聞けば隣の郡から、トラブルが起こらぬよう仕事でやってきたと言うことである。また、子ども相手の店も出ている。竹に藁を巻き付けて、それにひごを差してその先にピストルを吊して売っている。もちろんおもちゃのピストルである。子どもたちはいつ手にいれたものか分からないが、お寺の建物や生け垣を利用して、ピストルを使って戦争ごっこに興じていた。また、お寺の主役である僧たちとはいうと、歌舞を楽しんではならぬという戒律に従ってか、隅の方で寂しそうに眺めているだけであった。

モーラムではたくさんの酒を飲む者がいるために、とても危険だと再三言われた。特に君達は外国人であるし、身の安全を保障できないから、ひとりでは行動しないでくれと言われていた。実祭に危険を感じることはなかったし、酔っぱらいに絡まれたと言えば当の先生たちであったかも知れない。しかし、先生たちは随分心配をしたのだろう、やってきた警察官を我々の警護役にしてしまったのである。寺を出るときから警察官とライフルに守られての行動であった。もっとも映画のように騒々しい警護ではなかったが、やはり何とも気持ちのよいものでは

ない。祭りから隔離されてしまった感じだ。郵便を扱っている事務所らしき家の前まで来て腰を下ろした。職務中ではあったが、つき合っていたいただいた御礼に、祭りの席ということでメコンと一緒に飲みながら話をしていると、帰りの時間がやってきてしまった。行きたくないというスカイラブのおじさんに無理に頼み込んでノンガンホーイ村まで帰ることとなった。一緒にウボンへ帰って、我々がお世話になった御礼に贈るバレーボールと一緒に買いに行くと言っていたウィラサック先生は友だちに引き留められて遅れて帰ることとなった。仕方なく我々3人だけでくたびれかけたスカイラブに乗り、来るときよりもゆっくりと朝来た道を帰って行った。ちなみに、ウィラサック先生は翌日の午後に我々を尋ねて来てくれ、無事バレーボールを贈ることができた。

13. 帰りに

村に着いて荷物をまとめ、お世話になった用務員さんに支払いを済ませ御礼を行って村を出た。たった3日で帰るのはなんとなく寂しい気がしたが、また来ることを楽しみにして、遊びをやめて見送ってくれた子どもたちに手を振って村をあとにした。村の入り口からバスに乗ると、昼間から飲んだお酒と3日間の疲れとですっかり眠り込んでしまった。

今回この村を訪ねて子どもたちの朝夕の生活と学校での様子を概略つかむとができた。しかし、同時にもっともっと知りたいこと、分からないことが明らかになってきた。子どもの生活をもっともっとと深く調査するために、また人々の生活や考え方を理解するために再びこの村を訪れたいと一層思うようになっていた。

注 釈

- 1) 我々のタイ研究は筑波大学の学内研究サークル「東南アジア保健統計研究会」として1983年に発足した。
- 2) 村々の入り口にあたる幹線道路には、こうした

輸送サービスを商売としている村人たちが1日客を待っている。

- 3) 学校の教員という職に身を置きながら、各種の郡や県のプロジェクトに一定期間出向して、学校に来ない先生たちがいる。これは政府の予算不足がもたらした人材不足を補う制度として機能しているようだが、中には田舎の学校に勤務することがいやで都市部でこうした職を探して、事実上登校拒否をしている先生たちもいるということであった。
- 4) タイ古来の嗜好品のひとつ。ピンロウの実の核を薄切りにし、貝を粉上にして赤く着色した石灰を塗ったキンマの葉に包んで噛む。味は渋く、や

や麻酔的なさわやかさを与える。(石井米雄監修(1993)『タイの辞典』, 同朋社, p.100)

- 5) 村には有線放送の設備がある。村長の家に有線放送のためのマイクがあり、スピーカーは村長宅横と学校、寺の3カ所にある。もっぱら村民への連絡用に使われている。校長先生宅を訪問したときも、村長が放送をしているところであった。
- 6) タイでは毎日午前8時と午後6時に国歌がテレビやラジオを通じて全国で一斉に放送される。国歌が流れている間、国民はそれまでの作業を一時中断し、直立不動の姿勢をとる。椅子に腰をかけていた者は立ち上がる。